

教育相談体制の充実に向けた一考察

－スクリーニング会議を通して－

串本町立潮岬中学校
教諭 新川 薫

【要旨】

本研究では、支援が必要な子供を早期から発見するためのスクリーニング項目を検討及び決定し、スクリーニング会議を実施した。筆者は、参加した教職員（参加者）への聞き取り調査や質問紙調査の結果から、スクリーニング項目の検討、スクリーニング及びスクリーニング会議の効果について考察した。スクリーニング項目の検討は、参加者それぞれが感じている気になる子供の様子を基にした。その結果、目立ってはいないが支援が必要な子供に気付く可能性と、ケース会議の対象となる子供を複数人で判断できる過程を見いだせた。同時に、参加者それぞれが、自身の子供との関わりを振り返ることで、普段の関わりが変わる可能性がうかがえた。また、スクリーニングに係る一連の取組を通して、教職員の相互理解の重要性を改めて確認することができた。

【キーワード】

スクリーニング項目の検討、スクリーニング会議、気になる子供、教職員の相互理解、子供についての理解

1 研究のねらい

筆者は、昨年度、時間の確保が困難な中でも持続可能なケース会議の在り方について研究し、協力校において実践した（注1）。その結果、参加した教職員のケース会議に対するイメージが改善した。子供を共感的に理解することで教職員の見立てや関わりにも変容が見られた。また、安全・安心な雰囲気の中で、教職員同士が自由に子供の情報を出し合うことで、教職員の相互理解も同時に深まった。しかし、ケース会議の在り方を考察する中で、支援が必要な子供を早期に発見し、支援・対応することやケース会議実施に至るまでにどのようなプロセスを経ることがより効果的か、ということが新たな課題として見えてきた。

学校心理学では、子供の援助ニーズの程度に焦点を当て、三段階の心理教育的援助サービスが提唱されている。一次的援助サービスの対象は全ての子供、二次的援助サービスの対象は一部の子供、三次的援助サービスの対象は特定の子供である（※1）。藤田（2017）は、石隈（1999）を基に三段階の心理教育的援助サービスを整理した（図1）。

文部科学省（2017）は、教育相談体制を構築するためには、既存の会議を活用するなどして、『『早期から学校組織として事案を把握する（スクリーニング）ための会議』及び『個別事案に対応するためのケース会議』を実施する必要がある』（※3）としている。「スクリーニング会議を定期的実施することで、重大な事案に至る前に早期発見及び支援・対応が可能となる」とも記されており、ケース会議と並んでスクリーニング会議の重要性が示唆されている。

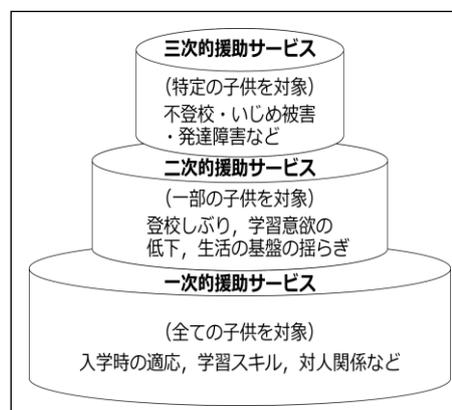


図1 三段階の心理教育的援助サービスの例（※2）（藤田2017を基に筆者作成）

文部科学省（2020）は、スクリーニングとは、「すべての児童生徒から気になる子をピックアップし、適切な支援や対応にふりわけること」（※4）と示している。

これらのことから、筆者は、全ての子供を対象としたスクリーニング及びスクリーニング会議を組み入れることで、教育相談体制を充実させたいと考えた（図2）。教育相談体制が充実することで、支援が必要な子供を早期に発見し、支援・対応につなげられるとともに、ケース会議実施に至るまでのプロセス

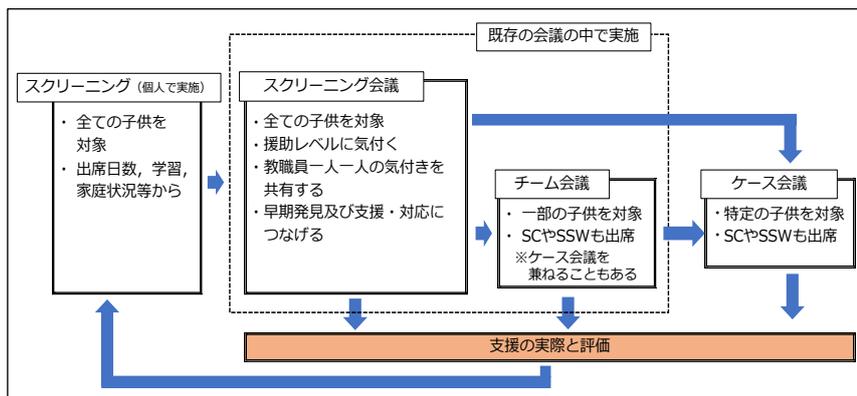


図2 スクリーニング及びスクリーニング会議を組み入れた教育相談体制（案）

を教職員個々の経験や知識に頼るのではなく、複数人による判断からケース会議の対象となる子供を決定できると考えた。

本研究では、支援が必要な子供を早期から発見するスクリーニングのためのチェック項目（以下、スクリーニング項目と略記）を協力校において検討及び決定する。さらに、スクリーニング会議を実施し、参加した教職員への聞き取り調査や質問紙調査の結果から、スクリーニング項目の作成、スクリーニング及びスクリーニング会議の効果について、考察する。

2 研究の方法

まず、教職員が個々に感じている「気になる」（注2）子供の様子を出し合うことを通して、二次的援助サービスを必要とする子供に気付くための視点を見いだす。この気になる子供の様子については、参加者それぞれの視点の違いが出やすく、気になる点や程度も人によって異なる考える。そのため立場や個性、年齢、経験、教育観等が異なるからこそ生まれる視点の違いをスクリーニング項目の検討に生かす。スクリーニング項目の検討及びスクリーニングのためのチェックシート（以下チェックシートと略記）（図3）の作成手順を表1に示す。

次に、作成したチェックシートを用いて、スクリーニング及びスクリーニング会議を実施する。スクリーニング会議では、参加者それぞれのスクリーニング結果を共有することで、目立ってはいないが支援が必要と考えられる子供を早期に発見し、チーム会議で検討したい子供を決定する。スクリーニング項目の検討及びスクリーニング会議は、協力校での研修会で実施する。

分析については、研修会の録画や逐語録、聞き取り調査、質問紙調査の結果を数値化したもの（注3）を基にし、考察する。質問紙調査は、家近・石隈（2014）を参考に項目を作成し、スクリーニング会議後に実施する（※5）。聞き取り調査は毎研修会後に実施する。

「気になる子供」には1を、「特に気になる子供」には2を記入してください。

出席番号	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16																合計点	備考	出席番号	
	氏名																			
1	○○○○	1	2	1	2												17		1	
2	△△△△																	0		2
3	□□□□	1	1							2							5		3	
4	●●●●	1	1	1	2					1							6		4	

図3 チェックシートのイメージ図

表1 スクリーニング項目の検討及び決定からチェックシート作成までの流れ

①	気になる子供の様子を出し合う
②	お互いの視点の違いや共通点を基に、二次的援助サービスを必要とする子供に気付くための視点を見いだす
③	②をスクリーニング項目とし、スクリーニングのためのチェックシートを作成する

3 協力校における実践とその考察

A地域にあるB中学校に協力を依頼し、筆者がファシリテーターを務める研修会を3回実施した。第1回、第2回研修会ではスクリーニング項目の検討及び決定を行い、第3回研修会ではスクリーニング会議を実施した。3回の研修会を通して、村山・中田（2012）を参考に、相手の考え方や意見を否定しないこと、安全・安心な雰囲気の中で、全員が自由に発言できるように意識することを約束事とした（※6）。それは今回のスクリーニング会議でも、昨年度の研究において実施したケース会議のように、視点が異なる教職員が、安全・安心が守られる中、子供の情報を自由に語り合うことで、子供に対する共感的理解が深まった体験が得られるようにしたいと考えたためである。

（1）第1回、第2回研修会（スクリーニング項目の検討）

第1回、第2回研修会の計画を表2に示す。

表2 第1回及び第2回研修会の計画

	第1回研修会	第2回研修会
事前準備	気になる子供の様子を付箋紙に書き出す（参加者）	参加者から出された気になる子供の様子を一覧にまとめる（筆者）
ねらい	気になる子供の様子を出し合うことで、お互いの視点の違いや共通点に気付く	第1回研修会で出した気になる子供の様子と二次的援助レベルの視点を基に、支援が必要な子供を早期に発見するための視点を見いだす
内容	スクリーニング項目の検討に向けて、気になる子供の様子を共有する	アイスブレイクとして「話したくなる聴き方」を体験する スクリーニング項目を決定する
参加者	教員（10名）	教員（10名）
実施時期	7月13日（月）	9月2日（水）
時間	14：00～15：00	15：00～16：00
場所	会議室	会議室
実施方法	グループワーク（1グループ5人）	ペアワーク、グループワーク（若手教員のみでグループを構成。1グループ3人程度）

第1回研修会後の聞き取り調査では、気になる子供の様子を出し合うことで、子供に対して「新たな発見があった。」「見方が全然違った。」という感想があった。また、「他の先生の子供に対する捉え方がよく分かった。」「以前一緒に勤務した経験から、共感し合えると思っていた気になる様子について、共感し合えない部分があり、感覚の違いに気付いた。」という感想もあった。これらの

ことから、気になる子供の様子を共有することで、子供を見立てるための新たな視点の獲得と教職員の相互理解につながる気付きがあったと見受けられた。

筆者は、第2回研修会を終えるまで、目立ってはいないが支援が必要と考えられる子供を早期に発見するためには、二次的援助サービスを必要とする子供に気付くことが重要だと考えていた。しかし、第2回研修会を終えて参加者から見いだされた視点は、二次的援助サービスを必要とする子供をスクリーニングするための視点だけではなく、学校の特色や地域性も含めた目の前にいる子供をスクリーニングするためのものであった。研修会での様子や聞き取り調査の結果から、目立ってはいないが支援が必要と考えられる子供を早期に発見するためには、二次的援助サービスに気付くための視点だけではなく、学校の特色や地域性も含めた目の前にいる子供に応じた視点も重要であることが確認できた。このことから筆者は、目の前にいる子供に応じた項目があることによって、参加者全員が自由に発言できるようになるのではないかと気付いた。そのため、第2回研修会を終えて参加者から見いだされた視点の全てをスクリーニング項目とした。

（2）第3回研修会（スクリーニング会議）

第3回研修会の計画を表3に示す。

表3 第3回研修会の計画

	第3回研修会（スクリーニング会議）
事前準備	チェックシートを作成する（筆者） スクリーニングを実施する（参加者）
ねらい	支援が必要な子供に気付く、チーム会議の対象となる子供を決定する
内容	それぞれがつけたチェックを基に、チェックにつながるエピソード等を語り合いながら、支援が必要な子供に気付く、チーム会議の対象生徒を決定する。
参加者	教員（11名）
実施時期	11月4日（水）
時間	15：00～16：30
場所	集会室
実施方法	グループワーク（1グループ4人程度）

お互いのチェックシートを見比べ、互いに質問したり、話を聴くことで気付いたり、思い出したりした子供に関する情報を出し合うことができた。

水野・家近・石隈（2018）は、教員は学級を単位に集団で指導するため、指導的な視点に立ちやすく、援助が必要な子供を発見しづらいと述べている（※7）。今回のスクリーニング会議においても、指導的な視点で気になる子供の様子が語られたため、自分自身の指導力が不足しているのではないかと、という思いに至った参加者がいた。しかしこの場で

は、それぞれの参加者が知っている子供のエピソードも含めて話をしてほしいと伝えたと
ころ、スクリーニング会議の雰囲気が変わった。部活動の大会前で不安を抱えている様子、
毎日犬の散歩に行く様子、保護者が忙しい時には、進んで食事の準備を手伝う様子等も含
めて語り合われたとき、新たな気付きが生まれ、子供の心情についての理解が深まった。

スクリーニング会議の後半では、今後チーム会議で話し合いたい子供について全体で共
有した。

4 全体考察

(1) スクリーニング会議の可能性

スクリーニング会議の可能性につ
いて、質問紙調査結果 1（表 4）より述
べる。質問項目③「自分一人だけで問
題を抱え込まなくてよくなると感じ
た」が 4.2 ポイントと高い。

聞き取り調査や質問紙調査の記述
には、研修会を通して「みんなが同じ
見方をしてくれていると感じることが
できた。」「自分が踏み込んでいい

のかどうか気になっていた子供のことについて、話げできた。」「他学年の子供の指導（支
援）では、その学年の方針などもあり、気を遣う部分があるが、次は他学年の先生方とも、
話したいと感じる研修だった。」とあった。スクリーニング項目の検討やスクリーニング会
議を実施することで、気になる子供に直接関わる参加者は安心感を得ることができた。そ
して、積極的に関わってよいか迷っていた参加者は、自分にできる支援の方向性を見い
だし、組織として連携して関わる体制づくりにつながる期待がうかがえた。参加者が「自
分一人で問題を抱え込まなくてよくなる」と感じていることは、質問項目⑤「自分の考え
を理解してくれる教職員を増やすことができると感じた」、⑥「教職員で連携して支援でき
るようになると感じた」のポイントが高いことから推察される。

また、質問項目⑦「同じ視点で子供を見ることができるようになると感じた」も 4.1 ポ
イントと高い。これは、スクリーニング項目の検討を通して、お互いの視点の違いや気にな
る点、程度の違いについて理解した上で、スクリーニング項目を定めたためであると考
察する。聞き取り調査でも「普段から感じていたことが項目として具体的にあり、このよ
うな視点で子供を見ればよいという基本線が同じになる。」という感想があり、子供を見立
てる共通の視点があるよさがうかがえた。

相手の考え方や意見を否定しないこと、安全・安心な雰囲気の中で全員が自由に発言で
きるように意識すること、という研修会の約束事のもと、スクリーニング項目の検討によ
って定まった視点があることで、自分の思いや考えを述べやすくなったと考える。石隈・
水野（2009）は、「ある教師が『最近、何となく気になる』と思ったとしても、いざ連携を
図るとなると躊躇してしまうことが多い」（※ 8）と述べ、「その子の苦戦の程度が『連携を
必要とするほどのものかどうか?』というレベル的な問題もあるし、『これを問題視するこ
とが、自分の力量や判断力を問われることにつながりはしないか?』と心配してしまうな
ど、教師自身や教師集団の問題もある」としている。スクリーニング会議は、教職員間の
連携を図ることを前提に、全ての子供から気になる子供をピックアップすることを目的と
している。それゆえ、気になる子供について自分の思いや考えを話すことへの抵抗感が低
くなったものとする。このことから話しやすくなったと考える。スクリーニング項目
の検討時には、自分の見方を積極的に話すことが難しいと感じていた参加者が、スクリー
ニング会議では話しやすさを感じていた。参加者は、聞き取り調査の中で、スクリーニ
ング項目があることで、具体的に話せる内容ができたためだと語ってくれたことから分
かる。

表 4 研修会後の質問紙調査結果 1 (n=11)

	質問項目	平均
①	子供のことについて、話が進むようになって感じた	3.9
②	今後も継続的に子供を支援できるようになると感じた	3.9
③	自分一人だけで問題を抱え込まなくてよくなると感じた	4.2
④	違った意見でも言えるようになって感じた	3.5
⑤	自分の考えを理解してくれる教職員を増やすことができると感じた	4.0
⑥	教職員で連携して支援できるようになると感じた	4.0
⑦	同じ視点で子供を見ることができるようになると感じた	4.1

そして、スクリーニング会議や聞き取り調査の中で、「誰もがチェックしていない子供は、果たして本当に気にならないのだろうか。」「子供のできないことをチェックして終わるのではなく、授業の中で自分にできることを考えるようになった。」という発言や感想があった。これらのことから、今後スクリーニング会議を重ねることで、指導的な視点と「援助」をバランスよく持ち合わせることで、目立ってはいないが支援が必要だと考えられる子供にも気付くことのできる可能性を見いだせた。

（２）参加者個人の変化

参加者個人の変化について質問紙調査結果２（表５）より述べる。質問項目⑬「子供との関わり方について、自分の普段の関わり方を振り返った」が4.7ポイントと高い。

聞き取り調査では、担任等の役割の中で、様々な業務や対応を迫られ、自分が関わる子供について丁寧に振り返ることが困難な現状が見えてきた。しかし、スクリーニングを実施することで、教職員が一人一人の子供を思い浮かべ、関わりについて振り返っている様子をうかがうことができた。自分自身の関わりについて振り返ることができたとき、子供の心情についての理解が深まり、自分に何ができるのかを改めて考え始めていた。

また、質問項目⑰「子供の行動について、今までと違う視点からも考えるようになった」も4.2ポイントと高い。聞き取り調査から、「別の先生からは、子供がこう見えているというのを知ることができた。」という感想が得られた。他の参加者が捉えている子供の様子を聴くことで、新たな気付きが生まれ、違った視点から子供を理解することができるようになったと考える。

表５ 研修会後の質問紙調査結果２（n=11）

	質問項目	平均
⑧	子供への接し方を工夫するようになった	3.3
⑨	もっと子供に関わろうと思うようになった	3.6
⑩	2次的援助サービスが必要だと感じた子供にすぐ対応するようになった	3.1
⑪	子供の問題に対する理解が深まった	3.8
⑫	話し合いで得た情報を子供との関わりに生かすようになった	3.7
⑬	子供との関わり方について、自分の普段の関わり方を振り返った	4.7
⑭	教職員同士の理解が深まったことで、安心して指導できるようになった	3.8
⑮	子供の情報をより把握しようとするようになった	3.8
⑯	子供の情報について、他の教職員とコミュニケーションをとるようになった	3.5
⑰	子供の行動について、今までと違う視点からも考えるようになった	4.2
⑱	子供のことについて、他の教職員と自由に話せるようになった	3.5

５ 今後に向けて

本研究では、スクリーニング会議を実施するために「気になる」という言葉をキーワードとしてスクリーニング項目の検討から研究を開始した。この「項目を検討する」という活動そのものが、学校の状況や子供達の様子、自分自身の普段の関わりを振り返ることや教職員の相互理解につながっていた。スクリーニング会議を実施する際には、まず「気になる」という言葉をキーワードとして、それぞれの参加者が気になっている子供の様子を出し合うことで、振り返りや教職員の相互理解を促す活動を導入として位置づけたいと考える。振り返りや教職員の相互理解がスクリーニング会議をより促進させるのではないかということについて今後も検証していきたい。

また、教育相談体制を充実させる必要性は十分に理解されているが、多忙な状況の中、それを機能させることが難しいのが現状である。２年間の研究を通して、スクリーニング会議やケース会議を実施し、参加者から出される子供に関する情報が共有されることで、自分自身の振り返り、子供の心情への気付き、教職員の相互理解を可能にすることが分かってきた。スクリーニング会議やケース会議から得られる新たな気付きによって、個々の教職員が互いに支え合う支持的な関係性が高まり、子供と積極的に関わろうと思えるエネルギーを生み出しているのではないかと考える。スクリーニング会議やケース会議を基にした教育相談体制の充実について、今後も研究を続けていきたい。

<注釈>

- 注1 令和元年度研修員研究集録（第45集）「ケース会議における教員の体験と変容に関する一考察－児童生徒理解の観点から－」を参考にされたい。
- 注2 吉田隆江『『気になる』とは何か』國分康孝・國分久子（監修）『教室で気になる子』図書文化社 pp.22（2003）によると、「気になる」について、「どこか『心にひっかかること』である。ある子どものことを考えたとき、なにかもやもやしたり、すっきりしなかったり、ちょっとなんとかしたいと思ったりすることがある。そんな心のありようが『気になる』ということなのである。」としている。
- 注3 選択肢を、「とてもそう思う」、「少しそう思う」、「どちらとも言えない」、「あまりそう思わない」、「全くそう思わない」の5つとし、それぞれを順に5点、4点、3点、2点、1点として合計した数値を回答者数で割ったものであり、最大値は5となる。

<引用文献>

- ※1 石隈利紀『学校心理学 教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス』誠信書房 pp.144～159（1999）
- ※2 藤田哲也（監修）水野治久・本田真大・串崎真志（編）『絶対役立つ教育相談－学校現場の今に向き合う－』ミネルヴァ書房 pp.5～6（2017）
- ※3 文部科学省「児童生徒の教育相談の充実について～学校の教育力を高める組織的な教育相談体制づくり～（報告）」 p.19（2017）
- ※4 文部科学省・大阪府立大学山野則子研究室（作成）「スクリーニング活用ガイド～表面化しにくい児童虐待、いじめ、経済的問題の早期発見のために～」 p.6（2020）
- ※5 家近早苗・石隈利紀「中学校教師の心理教育的援助サービスに関する意識変容尺度の開発：コーディネーション委員会への参加に焦点をあてて」『教育相談研究』編集委員会『教育相談研究49集』pp.33～41（2014）
- ※6 村山正治・中田行重『新しい事例検討法 PCAGIP 入門パーソン・センタード・アプローチの視点から』創元社 pp.22～33（2012）
- ※7 水野治久・家近早苗・石隈利紀（編）『チーム学校での効果的な援助 学校心理学の最前線』ナカニシヤ出版 pp.198～199（2018）
- ※8 石隈利紀（監修）水野治久（編）『学校での効果的な援助をめざして 学校心理学の最前線』ナカニシヤ出版 p.84（2009）

<参考文献>

- ・影浦紀子「教師の専門性としての子ども理解」小柳和喜雄・久田敏彦・湯浅恭正（編著者）『新教師論－学校の現代的課題に挑む教師力とは何か－』ミネルヴァ書房 pp.34～46（2014）
- ・教育相談課室「個と集団へのアプローチ－派遣業務を通して－」和歌山県教育センター学びの丘『平成28年度研究紀要』p.37～46（2017）
- ・小島弘道（監修）石隈利紀・家近早苗・飯田順子（著）『学校教育と心理教育的援助サービスの創造』学文社（2014）
- ・佐古秀一「学校組織の個業化が教育活動に及ぼす影響とその変革方略に関する実証的研究－個業化、協働化、統制化の比較を通して－」鳴門教育大学『鳴門教育大学研究紀要 第21巻』pp.41～54（2006）
- ・高橋典久・新井肇「共通認識に基づく生徒指導を阻害する要因に関する研究－『生徒指導』に関する用語の齟齬に着目して－」兵庫教育大学都道府県連携推進本部『兵庫教育大学と大学院同窓会員との共同研究：研究成果報告書』pp.1～5（2015）
- ・富山県教育委員会『子供のために先生が気づいて動けるチェックリスト』（2019）
- ・橋本市子育て世代包括支援センター・大阪府立大学人間社会システム科学研究科山野則子研究室『スクリーニングスタートマニュアル』（2019）
- ・文部科学省『生徒指導提要』教育図書（2010）
- ・山野則子『学校プラットフォーム－教育・福祉、そして地域の協働で子どもの貧困に立ち向かう』有斐閣（2018）
- ・山野則子・石田まり・山下剛徳「学齢期における子どもの課題スクリーニングの可能性：チーム学校

を機能させるツールとして」大阪府立大学人間社会システム 科学研究科人間社会学専攻社会福祉分野
『社会問題研究 第69巻』 pp. 1～11（2020）

・和歌山県教育委員会『子どもの安全・安心サポートマニュアル 見逃さないで！子どものSOS』（2015）